シン・わたしとコーヒーハウス

井口啓太郎　54
池田幸子　55
伊藤時生　55
入山　頌　56
上野綾夏　57
小﨑貴央　58
片岡　優　59
河合伸太朗　59
菊地宏亮　60
北脇慶亮　61
小泉　諒　62
兒玉小雪　62
佐藤愛子　63
椎谷日菜　65
末光　翔　66
舘真理恵　67
針山和佳菜　68
比嘉健太　69
船橋夏実　69
保科　瑛　71
牧野淳史　71
松井遊太郎　72
緑川菜々実　73
ミンジュ　74
森井七生　75
森本彩里紗　76
米川愛実　77
鷲尾勇輝　78

コーヒーハウスはそういう場なのだった。

井口 啓太郎

昨日も書きたくもない原稿を書いてしまった。あまり知りもしない人様からいただいた「お仕事」（お金をもらうわけではない）だし自分の勉強にもなるし、とか思って引き受けたけども、結果できあがったものは AI のほうがもっと上手にまとめられたのではないかというような文章だ。自分の安請け合いの態度にも書く能力にもうんざりする。いったい自分がやりたいことはなんだったのか、それすらよくわからない。

もういいや、時間もない。今日はただ嬉しかった記憶を好きに書いてしまおう。そういえばコーヒーハウスは、そういう場のはずだったような気がする。

2024 年 12 月のコーヒーハウスのクリスマス会では、バンド演奏に混ぜてもらった。15 回ぐらい参加してきたクリスマス会でもバンド演奏は久々のことだった（2 回目）。
今回の経緯は、9 月ぐらいに遡る。のちに組むことになるバンドでボーカリストとなるスタッフの一人が「バンドやりたいんすよね。井口さんがむかしバンドやってたって聴きましたよ。やりましょうよ」と声を掛けてくれた。最初はなんでこんなおっさんを誘ってくれてるのかな、とか思っていた。本気だとしても、だれか別にやる気のあるやつを紹介してつないでやればよいか、などと思っていた（こう書くと気付くが、僕は嫌なやつだな）。実際今回はなぜか 3 組もバンド演奏があるという（もうコーヒーハウスフェスじゃないか）。だったら、「おっさん化」しつつある私が出る幕などない。私はもう「青年を語るおっさん」になってしまったのだろうか。（長澤勇気「青年室について」国立市公民館『くにたち公民館 60 周年記念誌』76 頁、2015 年）

しかし、どうやらボーカルはマジだった。井口とやりたいのだという。そこまで言われると嬉しい。ブランクがある私やバンド未経験のベースが入っていても、ボーカルはしっかりキャラが立ってるし、ここにちゃんとバンドをやっているドラム（本当はギターが本職なのだろうが）や合唱でならした激うまのピアノが加入したおかげで、それなりにバンドらしくなってみんなで合わせるのが面白かった。忙しい日々の合間をぬってスタジオに何度か入っても、私はろくに練習ができていないので、結局演奏はグタグタだし本番でもバンドの足を引っ張ってしまった。でもそんなことはもう関係ない。

本番当日、私が見た光景は、笑顔で手を叩いたりスマホで撮影したりそれぞれに身体を揺らすみんなだった。もちろんほかの 2 バンドも最高だったし、僕は観るのも演るのも楽しすぎた。観てくれていたメンバーの一人はずっと飛び跳ねて踊り狂っていた。また別のメンバーは、ドラム（あいつ遠慮なく叩いてたな）やアンプからの爆音や振動に驚いてしまいずっと耳を塞いでいて、スタッフや職員がフォローしてくれていたらしい（さすがだな）。でもそんな体験をした日があったっていいじゃないか。もちろん苦痛を味わう必要などはないけども、音の渦に埋もれてみないと身体がふわっと軽くなるような浮遊感も、耳鳴りの余韻も、何でもできそうな気がする高揚感も共有することはないかもしれない。

すでに来年はもっとみんなで歌ったり演奏したりできないか、もっと準備段階から参加の機会があれば、あるいはクリスマス会を飛び越えて市民文化祭で一緒に出来ることはないだろうか、などというアイデアも聞こえてくる。

やはりコーヒーハウスは、そして音楽は楽しい。これを書いていて思い出した。昨年夢中になって読んだ本の一節を引用してみたい。

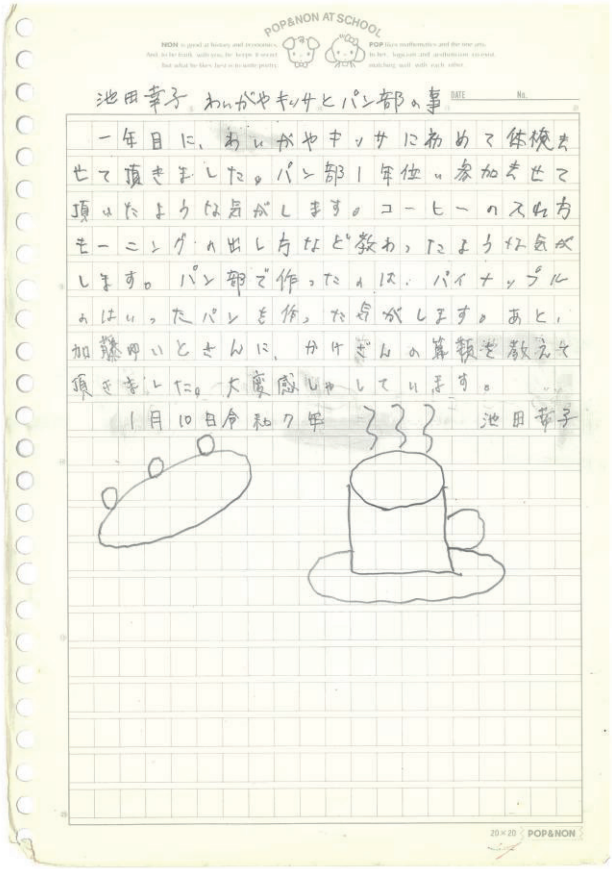
パンクスはギターを手に取り「なぜ私にはこれ

が弾けないのか」と考え、キーボードを前に「なぜ自分の意見が通らないのか」を思い、自分の周りの世界をみて「なぜ物事は、これほどまでにめちゃくちゃなのか」と問う。（川上幸之介『パンクの系譜学』書肆侃侃房、366 頁、2024 年）

何度でもやりたいことを探すことにしよう。別にコーヒーを美味しく淹れられなくたって、サッカーボールを上手に蹴れなくたって、もちろんギターなんか弾けなくても構わない。もっと思いついたことを話してみたり、仲間の話を聴いて考えたり、誰かに誘われて一緒に踊ったりしたい。コーヒーハウスはそういう場なのだった。

わいがやキッサとパン部の事

池田 幸子



人と関わることの大切さ

伊藤 時生

自分は今年の５月からスタッフとしてコーヒーハウスに参加し始めました。自分がコーヒーハウスに来て驚いたことは、同世代のスタッフととても早く自然に友達になれたことです。普段の自分は同世代の人と仲良くなるのに時間を要することを日々感じて過ごしてきたからこそ、コーヒーハウスのスタッフの人は大人の方たちも含めみんな温かくて、警戒心を持たずに接することができることを強く感じました。これまで、自分にとって同世代の人達とは、自分を攻撃してくるものだと心のどこかで思って生活していたのですが、コーヒーハウスの同世代のスタッフは講座内だけでなく活動の外でも遊びに誘ってくれたりと、自分が何か特別な努力をしなくても、ただその場にいる仲間として仲良くしたいという気持ちで自分を受け入れてくれました。このことから、自分が、学校というメインのコミュニティで周りに受け入れられなくても、外の場所で受け入れてくれる人はいるんだ、メインのコミュニティだけに固執しなくても良いんだという安心感と、本当の意味での友達が新しくできる感覚を久しぶりに味わうことができました。なので、コーヒーハウスの同世代の人達の存在は自分にとってとても有難いです。また、学校や地元から離れた場所に、くつろいだり会話を楽しんだりできる居場所があること、そこを居場所として利用できるようにしてくれているコーヒーハウスの方々にも感謝しています。

コーヒーハウスについて書く上で外せないのはメンバーさんとの交流です。メンバーさんとの関わり方について、ただでさえコミュニケーションがあまり得意でない自分にとっては、普段接することのない、しょうがいをもった方と関わること

は難しいものだと思っていたのですが、講座に参加する中で、他のスタッフさんのメンバーさんとの関わり方を見て、ただ一緒に楽しく活動するだけで良いのかもしれないと思うようになりました。そして、やっぱり自分にとってのコーヒーハウスのいちばんの魅力は、スタッフさんメンバーさん関係なく、様々な世代の、いろんな考え方を持った人たちと関われることです。自分は、人に対して敬意をもって接することを、時々できなくなるからこそより大切にしているのですが、コーヒーハウスの人と話していると、自分が話したことのあるコーヒーハウスの〇〇さんは他の人によると過去にこんなことをしていた、～な一面がある、など、自分が知っている〇〇さんの情報はその人の人生の氷山の一角に過ぎなくて、その背後には自分が知らないような経験を沢山してきているのだと気づく場面がよくあります。その度に、他の人に対して、自分が見ているその人の様子などで主観的に判断せず、その人の奥にあるその人の人生を想像して敬意をもって接することの大切さを、コーヒーハウスで過ごす中で改めて考えることができました。

まだ参加し始めて一年にも満たないですが、自分の生活を豊かにしてくれたコーヒーハウスという居場所と、関わってくれている人達に本当に感謝しています。自分は人見知りであまり喋らず、いつもマスクをしていて緊張している時は顔もこわばっているので話しかけづらいかもしれないですが、調子が良い時はよく喋るのでこれからも仲良くしてもらえると嬉しいです。

支配を恐れぬ、自由の霊薬をもて

入山　頌（しょう）

酒がやめらんねえ。義務感の炎に石炭をくべて、顔で笑って心で泣いて、痙攣しながら寝ている。もうくたくたである。ムカつくことが頭にべっちょりついて熱を帯びている。嫌な言葉ばかりが浮かぶ。コーヒーハウスは楽しい。でもそれ以上に大変だ。今はもうあんまり楽しくない。けれどもだ、まじやめらんねえ。だって必要なことだから[1]。

一人で飲んでいると、こんなことばかり考えてしまう。なんだかなあ。楽しかったんだよコーヒーハウス。楽しいんだよコーヒーハウス。

あなたはしょうがいしゃですと言われた瞬間から、支援にはりついた管理・暴力・介入とともにあることは（良心的でかつ正しければその限りではないが、それはコイントスと同じだ）、尊厳が大きなリスクに常にさらされていることを意味する。しかしそれでも生きていかざるをえない。だからこそ、どのような形であれ、今日も一緒にいたな、ということが繰り返されれば、わたしたちは少なくともコーヒーハウスのなかでだけでも、なんとかなるかもしれない。

だからコーヒーハウスは必要なことである。しっちゃかめっちゃか、忘れてしまいたいことと忘れてはいけないことがあり、楽しかったことと楽しくなかったことがあり、傷つけたことと傷ついたことがつねにともにある。そうだろう？

わたしたちの愚かさの一部分は、人の豊かさに不可欠なものであるように思う。これはよくて、これはよくない。もしそれが正しかったとしたら、

1　これは依存ではなく自立の問題である、ということを強調しておきたい。少なくともわたしは、わたしのなかにバートルビーを秘めていることを自覚してこの文章を書いている［メルヴィル　２０１５］。ほうっておかれたら死んでしまう命があり、ほうっておいてほしいという心のさらされがあり、これは苦しさを前提として両立しうる。楽しいか楽しくないかではなく、誰かと共にあることは、それ自体が生存に抵触している。傷つけあいながら、その傷が柔らかく隆起して癒されること、その傷跡を無視しないことが共生ではないか。

わたしはわたしでいられなくなるだろう。酒は人を狂わせるからだ。でも、わたしは酔っぱらった自分を肯定してみたい。

わたしはいま大丈夫です、ちゃんとしています、その証拠にほら、手も震えていないし、ムカついていないし、他人の幸せについて真剣に考えながら仕事もしているし……。

でも、それは自分の中の複雑さを下にぎゅっとおさえつけているだけのようにも思う（燃えるゴミの日の朝のように）。ゴミには自分の複雑さが詰まっている。あれはわたし自身だ。自炊が面倒な時に続いたスーパーのお弁当箱、卵パック、腐らせてしまったもの、シコッたティッシュ、殴り書きのメモ、くしゃくしゃのレシート、排水溝にたまった抜け毛……。

ゴミはわたしで、わたしはゴミである。複雑さを抱えながら生きている素朴な人間である。けれども、それを証明することはできても、理解してもらうことの方がなんだか困難であるように思う。もういいやと思って捨てているものは、もしかしたら（かつて）自分の一部だったかもしれないということ、なんだけど。

人類学者のエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロは、イエズス会の宣教師たちの苦悩を、これから支配をしようとしている彼らの飲み会、酒から捉えようとした。向こうは悩んでいて（あるいはしらふで）、こっちは悩んでいない（あるいは酔っていて）とき、向こうはなにに悩んでいるのか。酒である。

トゥピナンバは、忘れないために酒を飲んだのであり、そこにこそカウイナジェン〔酒盛り〕の問題があった。宣教師たちは、これらの宴と、自分たちが廃止したいと思っているあらゆるものとの間に危険な関係があることを認識し、それを非常に疎ましく感じていた。［カストロ　２０１５：１１０］

だけれども、わたしはわたしだ。もっと酔っぱらっちまえばいいのである。

トゥピナンバのカウイナジェンは記憶による酩酊であったという。その特殊性をも思い起こさせる。酔っ払うことでインディオたちは、キリスト教の教えを忘れ、思い出すべきではないことを思い出した。カウインは、気まぐれさの霊薬だったのである。［カストロ　２０１５：１１３］

記憶は癒し、傷つける。酒はそのことを思い出させてくれる。

健やかなる宣教師たちに愛をこめてハグを。そしてこう主張する。ご親切にありがとう、わたしはわたしです。あなたもどうかいい一日を！

参照文献

メルヴィル、ハーマン　２０１５　『書記バートルビー／漂流船』（牧野有通訳）光文社。

カストロ、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ　２０１５　『インディオの気まぐれな魂』（近藤宏・里見龍樹訳）水声社。

書かなくていいから飲み行こ

上野 綾夏

文章を書くのは好きなんだけど、昔からどうにも「振り返り」とか「感想」を書くのはとっても苦手。反芻をひたすら繰り返す牛のごとく、消化に時間がかかるタイプだと自覚している。まるで。3月頭現在になってもまだ書けなくて、背水の陣。（あまりにギリギリに書きあがったので、タイトルは編集担当Ｍ氏が仮として入れてくれたものを反省の意を込めてそのまま使用する。）

映画『メリー・ポピンズ』をご存知だろうか。魔法が使えるナニーのメリー・ポピンズとバラバラになってしまった家族たちとの交流を描いた話で

ある。「ずっとここにいてくれる？」と聞くこども達に対してメリー・ポピンズはおすまし顔で「風向きが変わるまで」と返すのだが、このシーンがとても印象に残っている。なにそれ、すごいかっこいい。

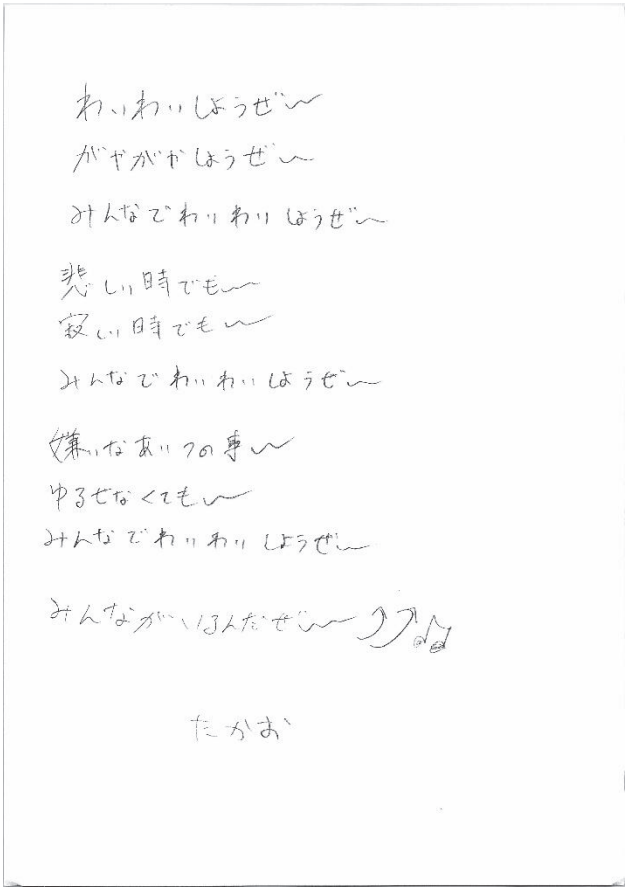
コーヒーハウスの活動で多くの人が通る道、それはいつまでここにいようかな？（いていいのかな？）ということもそのひとつだと思う。学校や仕事との兼ね合い、ライフステージの変わり目、スタッフやメンバーの様々な変化に焦りや不安を覚えたり、なにより自分より若いみんなにとって居やすい場所であるためにどうしたらいいかなとか考えたり。そういうときに限ってあまり面白くない方に想像力を発揮してしまう。私もそのひとりである。何にせよ、あれこれ考えていても、なるようにしかならない。ずっとこうしてなんとか続いているのだから、きっと大丈夫なのは分かっている。でも、居心地がいいからこそ、の裏返し、壁なのだと思う。幸せというのは諸刃の剣でもある。それでも、みんなと「また明日！」「また来週！」と言い合えるのはとても嬉しいし（時々「また数時間後！」という元気すぎるパターンもある）、なんなら予期しないタイミングで公民館でバッタリ会えてしまうのも楽しい。

メリー・ポピンズは東風と共にやってきて、すっかり幸せそうになった一家を見つめて、西風と共に去っていく。いずれは誰にとっても、そういうときがくるものだ。でも、風向きはいつでも変わるからこそ、ふらりふわりといつでも好機はあるはず。自分にとって必要な時にはただそこにいられる。「求めよさらば与えられん」とはよく言うし、と、思うじゃん？コーヒーハウスは、特に求めなくても与えてもらえる、意図せずにgiveし合える、そんなすごい場所だと思っている。

初めて「メリー・ポピンズ」を観たとき、大号泣してしまった。私は8歳だった。現在に至るまで映画を観てあんなに泣いたことはたぶん、ない。別れも告げずに飛んで行ってしまうメリー・ポピンズがあまりに寂しそうで、一家をどれだけ幸せにしても、メリー・ポピンズの幸せはどこにあるんだと、トトロのメイちゃんばりにわんわん泣いた。でも、数日後、図書室で拍子抜けすることになる。「メリー・ポピンズ」の原作はシリーズ化していたのだった。あの涙を返してほしい。でも、あぁ、良かった。物語は続くのだ。

わいがやの歌

小﨑 貴央


わいわいしようぜ〜
がやがやしようぜ〜
みんなでわいわいしようぜ〜

悲しい時でも〜
寂しい時でも〜
みんなでわいわいしようぜ〜

嫌いなあいつの事〜
ゆるせなくても〜
みんなでわいわいしようぜ〜

みんながいるんだぜ〜♪♪♪

たかお

おふざけはおしまい

片岡　優

「有り難い（ありがたい）」という言葉は、「有るのが難しい」、つまり、「存在しているのが稀なことである」という意味から来ているらしい。

居酒屋のどこかにでも貼られている説教のようだが、青年室にいると、時々そう思うのである。

この秋、学生の頃にお世話になっていたボランティア団体が、活動の規模を縮小した。自分が関わっていた時も、資金や参加者を集めるため、常に頭を悩ませる姿を見てきた。

コーヒーハウスを見ると、よくぞ何十年も続いてきたものだと思う。公民館の場所・予算・職員さんといった支えがあること、手弁当で活動する仲間が集まり続けていること、その一人ひとりに時間や健康、周囲の理解があること。その全てが当たり前でなく、本当に恵まれたことだと思う。

そうはいっても、聖人君子でも何でもない、未熟な自分である。良くも悪くも人間の様々な側面が強く出る磁場がここにはあるので、言い争いをすることや、余裕がなくて苛立ってしまうこともある。かつてはそれが余りに行き過ぎ、深刻な課題に直面する中で、もうこの場を去ってしまおうかと思ったことが何度かある。でもそうした時も、色んな人たちの言葉や表情に励まされ、踏みとどまることができた。そうしたことを繰り返すうちに、ある頃から、「他人が思い通りにならないことを学ぶために、自分はここに来たのだなあ」と思うようになった。

先に述べたボランティア団体の尊敬する大先輩が、このように活動を振り返っていた。

「“今までやってきた”んじゃなくて、色々やっている内に“やって来れちゃった”だけなんだ。」

そうだ。ここは会社でも学校でもない。それぞれの思いや、楽しみのために集まっているだけの場所だ。きっちりやる必要なんか無いし、やろうとすると無理が出る。皆が色々手を出したり引っ込めたりして、そのうち何となく形ができていく。それで良いんだ。

あの時この場を手放していたら、そうした様々なことに気づくことができなくて、勿体なかっただろうなと思う。自分がここまでやって来られたのは、皆のお蔭です。

有り難う。

戻ること

河合 伸太朗

コーヒーハウスと出会ったのは、ひょんなことがきっかけだった。

学生の頃、国立市の学習支援事業に携わっていた。学習支援の教室は国立市公民館だったから、当時は公民館によく足を運んでいた。でも、社会人になってからは生活環境がガラリと変わって、公民館とはしばらく疎遠になった。そんな時期に、久しぶりに会った当時の仲間の一人が、コーヒーハウスの活動に誘ってくれた。幅広い年代の人たちが、公民館を起点として交流を深めていく。そんなコーヒーハウスの風景を見たとき、学生の頃の記憶と重なって懐かしい思いがした。この間は、縁が繋がって出会った仲間たちと共に、バンド演奏をさせてもらった。大好きな音楽で、目の前の人たちに笑顔を届けることができた。その実感を味わえたことが、素直に嬉しかった。

人生は、よく”旅”に例えられる。なるほど、上手い例えだと思う。”旅”には、色々な種類がある。目的地に向かって真っすぐ進む”旅”。行先を決めずに寄り道を楽しむ”旅”。まだ見たことのない景色を見るための”旅”。懐かしい場所に戻って思い出にふける”旅”。どのような”旅”を選ぶかは百

人百様。同じように、どのような人生を選ぶかも、百人百様なのだと感じる。

私は、懐かしい場所に戻って思い出にふける”旅”が好きだ。公民館という、懐かしい場所。学生の頃の記憶と思い出が詰まっている場所。そんな場所に時々戻りながら、自分の旅を、人生を楽しんでいきたい。

私と公民館をもう一度繋げてくれたコーヒーハウスと、それを支えている皆さんに心より感謝します。

わたしたちは「どう生きる」か？

菊地 宏亮（こうすけ）

「我(が)」

わたしは、その人の本音やゆずれないこだわりを「我」と表現している。もしかすると、アイデンティティと言い換えてもよいかもしれない。そして、私は他人の「我」が発揮された瞬間に出会うと昂揚する。そのため、酔っぱらいの戯言という免罪符を握りしめて、時折「我をみせろ！」とからんでしまう。そんな面倒くさい人間の「我」にしばしお付き合いいただければ、これほどうれしいことはない。

2023 年 7 月 14 日、宮崎駿監督の最後の作品として『君たちはどう生きるか』が公開された。この作品は、事前の告知を一切やらないという斬新な広告戦略によって、話題を呼んだ。かくいう私も、その戦略にはまり劇場に足を運んだ民衆の一人である。映画のタイトルのように「どう生きるか」について、一貫して視聴者に強く訴えかけていた内容だったと思う。そこで、本稿では、「どう生きるか」という問いに対する私なりの見解を述べたい。

まず、私たちが「生きる」舞台となる現代社会について述べる。現代は個人の意思や自由を重視し、より多様性の尊重を目指す社会になった。終身雇用や年功序列などの前提は崩壊し、なんとなくの人生のレールが示されていた社会はすでに崩壊しつつある。それに伴って、しきりに主体性や自己実現が叫ばれるようになった。その中で、私たちは価値を感じる対象やその度合いを否応なく問われ、唯一無二の生き方を描き出しそれに向かって努力することを社会に強制されていないだろうか。言い換えれば、自らの「我」と向き合わざるを得ないのが現代社会といえるであろう。

では、こうした現代社会で「生きる」とはどういうことなのだろうか。私は「どう生きるか」の中には、「どう生きたいか」「どう生きるべきか」「どう生きることができるか」の 3 つの問いが内包されていると思う。各問いは似て非なるものである。1 つ目は純粋な個人の欲求に関する問いであり、2 つ目は社会規範や他者からの要求への応答に関する問いであり、3 つ目は個人の能力や置かれた環境などを踏まえた実現可能性に関する問いであるといえよう。そして、3 つの問いの答えをもとに再構成していくことで、当初の問いの答えを導き出していくことになるだろう。ここで厄介なのは、この 3 つの問いが矛盾を抱えていることである。例えば、全員が欲求を満たそうと行動すれば、社会規範は乱れて社会そのものの存続が危うくなる。また、自分の欲求だけ強くても実現可能性が伴っていなければ失敗し自己実現はできないだろう。私たちは、「どう生きるか」の答えを導き出す過程で葛藤を避けられない。だからこそ、この問いは難解なのである。

これまで偉そうなことを述べてきたが、私自身「どう生きるか」についての明確な答えは現状、持ち合わせていない。個人的なことをいえば、就職や博士課程の進学など、人生を大きく左右する分岐点の選択には頭をかかえている。影分身の術

を使えたら、やりたいことを全部挑戦できるのにと、夢想することはしょっちゅうである。しかし、現実に私たちの身体は１つしかなく、葛藤にケリをつけなければならないタイミングがいつかくる。決断に際して、大切なことは、やはり「我」に従うことなのかもしれない。某テーマパークの某アトラクション風にいうのであれば「心のコンパスに従う」ということだろう。そして、私は来たる時に備えて自らの「我」を醸成していくために、本能的に人に絡み、他者の「我」みたがるのかもしれない。私は、私が思うよりも私のことをずっとわかっていないのだ。

最後に、みなさんは自らの人生を「どう生きる」と考えているのですか？みなさんの「我」をみせてほしいです。

続きはまたの日に

北脇 慶亮

急に自分語りを始める人とか、話の切り替えが唐突な人とか、下品なことばかり言う人とかっているじゃないですか。ホント勘弁してほしいですよね。

ところで、私にはダウン症の弟がいます。だからと言って、特に何がある訳でもなく、普通に兄弟として仲良くやっています。ただ、なんとなく彼の世界は私とは違うものなんだろうなとずっと考えていました。

弟は幼いころから、架空のカメラでシャッターを切る真似をよくしていました。両手の親指と人差し指を合わせて四角形を作って、ファインダーをのぞき込むあれです。家族でどこかに出かけた時などに、ちゃんと写真を撮るべきタイミングでシャッターを切ってくれます。何なら、それっぽく「もうちょっと寄って」みたいなことも言ったりします。単なるごっこ遊びと言えばそれまでですが、私はそれを見て、彼は独自の世界を生きているんだなと思っていました。

10年ほど前、久々に実家に帰り、家族全員で夕食を楽しんでいると、弟が写真を撮ると言い出しました。そして自然な動作で架空のスマホを取り出し、構えたのです。何なら、それっぽく親指と人差し指でズームを調整したりしています。

「そうなんだよ。最近スマホに変えたみたいでさ」と、父親は笑ってしゃべりかけてきましたが、私は内心とてつもない衝撃を受けていました。彼が「俺と同じ世界に生きている」という事実に、唐突に気が付いたのです。みんながスマホで写真を撮る時代になったから、弟もスマホにしたわけです。当たり前のことですが、彼も同じ世界に生きているんです。

今となっては些細な笑い話ですが、この出来事は私の心に強く残っています。

急に自分語りを始めてすいません。言いたいことはこれからです。あの時感じたのと同じ衝撃を、私は２年前にコーヒーハウスの活動に参加して感じました。ここに集まるみんなは「同じ世界に生きている」ということを理解しあって、楽しんでいたのです。コーヒーハウスにはいろんな人がいますが、みんなが同じ世界に生きて、同じ空間を作り上げています。驚きました。私がたまたま辿り着けた結論を、もっと広い視野で実現している場所があったわけですから。

なんかうだうだ書いてしまいましたが、この２年間、超楽しませてもらいました。ありがとうございます。みんなに卓球を教えたり、西洋竹馬を披露したり、ずっと一人で弾いてきたギターで憧れのバンド演奏をできたりと、これまでの人生がスラムドッグ$ミリオネア的にはまった感覚がありました。これからもよろしくお願いします。

そういえば、この前ウンチを踏んでしまいました。しかも犬のとかではなくて、人のです。人糞です。ホント勘弁してほしいですよね。

所感②

小泉 諒

現代社会では、お金やステータスといった集団で共有されたわかりやすいモノサシによって、個人の価値が判断される傾向が顕著である。収入やステータスといった外面的なわかりやすい基準が過度に重視される一方で、内面的な満足や自己実現といった主観的な価値は、ともすれば軽視されがちだ。しかし、エーリッヒ・フロムやバートランド・ラッセルの思想に触れるとき、私たちはこのような状況に根源的な疑問を抱かざるを得ない。彼らは、真の幸福や自由は、物質的な成功に依拠するのではなく、自己の創造性や余暇を通じた自己実現にこそ宿ると説いている。そんな中で国立市公民館は、まさにそのような主観的価値を育む場として現代社会においてきわめて重要な役割を担っていると、私は強く感じる。

フロムは、『自由からの逃走』において、人々は自由を得たにもかかわらず、その責任の重さに耐えられず、思考停止に陥りがちであることを指摘した。自由な状態では、何をすればよいのかがわからず、強大な権力が示す「正解」に安易にすがってしまう危険性があると。現代社会においても、画一的な価値観や消費行動が、かつての権威に代わる存在として、人々を無意識のうちに支配している場面が多々散見される。

また、ラッセルは、『怠惰への讃歌』において、余暇こそが人間の幸福と文明の進歩に不可欠であると述べた。彼は、ただ労働に追われるのではなく、創造的な余暇活動を楽しむことの重要性を強調している。

国立市公民館は、まさにフロムやラッセルの理念を体現する場と言えるのではないか。そこでは、人々に多様な活動を提案し、主体的な選択の余白を残している。そして、成果や競争を求められることなく、自らの興味や関心に基づいて活動することが奨励されており、このような環境で、参加者は自己の価値を再発見させ、人生に真の充実感をもたらすのではないだろうか。

現代社会において、物質的な成功や他者からの評価だけでは測れない主観的な価値こそが、実は本当に重要なものではないか。国立市公民館は、そのような価値を見出すための場として、現代社会においてますます重要な役割を果たしているように思う。また、自由な時間をいかに使うかという根源的な問いに対し、国立市公民館は、その答えを人々に寄り添いながら共に探す場であり、人々が自らの人生をより豊かにするための確かな手助けをしていると言えると考える。

可愛い魔法にかかる季節
コーヒーハウス一周年とこれから

兒玉 小雪

暑いと思ったら急に寒くなってきましたね!! そして女の子が最強に可愛くなれる季節が到来!! 色んなブランドが可愛い洋服を出してたり冬限定のコフレとかも可愛すぎて全部欲しくなっちゃう

(ᑊ˴˴ᐳ̤̇ ̤̇ᐸ̤̇˴˴ᑊ)ᵕ̈

さてさてコーヒーハウスに来てもう 1 年……色々なことがあったなっと実感します ๑ᵕ̈ω๑ᵕ̈
イベントごとに出れたり充実した 1 年だったな……2025 年はどんなとしになるんだろ？今からワクワクしてます(ᵘ∩ɞ⟶ᵕ̈ɞ⟶∩ᵘ)

半年前の記憶ってほぼ残らないよね

佐藤 愛子

高校２年、私はバイトがしたかった。金が欲しいとかではなくただただ働いて様々な出来事を経験したかっただけである。あと社会不適合適正抜群コミュ力皆無引きこもり予備軍な私に少しでも社会適正あるよと自信を持ちたかったから。上記の理由からただ働きで働いても良かった。しかし、ここで壁にぶつかった。私は部活をやっていて、その部活が多分学校で１番きついというか厳しめでバイトで部活休みます！とは言い難いものだったのだ。これでは、バイトしようにも平日はできず土日しかできないし土日全部潰れるのは困るしで不味い状況だった。私は考えた、どうしたらバイトを円滑にできるかひたすら考えた、どれだけ考えたかというとトータルで３時間ほどだ。悩み事はどうして悩んでいるのか、これが理由で悩んでいるの２点を整理すればあとは解決すると思ってる。この悩んだ末に私はバイトを諦めた。理由は、週１勤務の高校生雇うところないだろというのと親にイラついたからの二つだ。前者は前者の通りだ、社会は効率的に雇用したいバイト未経験の週１勤務の高校生雇いたくもないだろう。後者は、バイトしたいという思いを母に唆したら要約すると『お前まともな生活力持ってないだろ？』と言われた。お前自分の過去の言動のせいで娘こうなってんだぞ海馬腐ってんじゃねぇの？と私は思った。これ以上書くとこの文章がとてつもなく長く、そして愚痴しか綴られてないものになるのでここで区切らせて頂く。まぁ、めんどいと、とりあえずめんどい。色々とバイトするために立ちはだかってくる問題が次から次に湧くのだからめんどくさいの一点である。そうやってバイトを諦めた高２の春であった。 時は流れ夏休み直前、私はクラスの掲示板に貼ってある一つの紙に目が止まった。国立市夏のボランティアのオリエンテーションするよ！って感じのことが書かれていた紙。どうせ夏休み暇だしな、大学の推薦入試に役立つかもなぁ、部活の休む正当な理由にできるなぁ。そんな考えが頭をよぎり私はすぐに申し込んだ。オリエンテーションの日が部活のコンクール本番２～３日前なのがなんだ、知らん、私にボランティアさせろ！この思いだった。そして当日午後に部活の衣装合わせ兼練習があり長袖制服私を殺す気か姿で会場に向かった。私は会場に２番乗りをし乾いた喉に向けて水をがぶ飲みしながら開始を待ち、説明が始まった。なんか色々と説明されてヤベェボランティア保険加入するための金持ってなかっ…あった！！！あったぞ！！！な状態になってなんか会場にいたみなさんに自己紹介をすることになって…みたいな感じでオリエンテーションを終え、真夏の道路を 20 分以上歩いて部活に向かい無事に部活の練習に挑んだ。先生がキレてた、うわぁと思った。そんな日だった。 さて、ここで問題です！後日どこの団体に申し込もうかと私は悩んだでしょうか？悩んでないでしょうか？チクタクチクタクチーン正解はぁ！！！！悩んでないでした～！何故ならその頃の私は空前絶後の喫茶店ブーム喫茶店好きになりすぎて喫茶店で働きたいと思っていた時期であった、ボランティア先候補の団体一覧でわいがやさんのページに目を通した瞬間、あコレ喫茶店だ、喫茶店業務いけるぞ！！！！行こう！！！！！！となった。夏のボランティア体験（これから先は夏ボラと略させていただきます）するために電話申し込みかぁと普段電話かけるのまぢ無理民、覚悟を決めた、夏ボラオリエンテーションでスタッフさんが言ってた電話かけたらその団体さんがでるから己の名を名乗ったり要件言ったりしなと言われたので練習に練習を重ねて電話に挑んだ。まず最初にわいがやさんのスタッフではなく公民館の人がでた、もう話が違う、違うって！！！！！！と叫びそうになりながら我が名を名乗りそして次の言うことを言おうとしたら公民館の人に予想外のことを言われ

（もう内容覚えていない）イレギュラー発生！！！！あの時の私の脳内はさながらタイタニック号が沈むとわかった乗客並みにパニクっていた。公民館の人を通してわいがやさんとコミュニケーションを取るため色々と報連相が長く手間取った。まぁ色々あり無事ボランティア体験日や時間を決められた。この時私は労働の相場を知らずフルタイムで全て申し込んだ。後々後悔した。 ボランティア体験初日、私はこの夏１番の愛想を出し挑んだ。とりあえず初日はおんぶに抱っこ、色々な作業を学んだ。コーヒーのドリップ楽しかった。合唱部入ってて良かった、合唱繋がりで雑談できた。など色々と楽しかった。しかし、労働時間の相場を知らん私は休憩時間の相場もわからん（今もわからない教えて欲しい）ので６時間くらいの労働時間に対し15～20分程度の休憩だけであとは全て立ちっぱの状態で過ごした。無事家に帰ると足が痛かった、夜サロンパスを張って寝た。翌日は昨日の痛みは嘘だったかのように痛みが引いていてサロンパスの偉大さを身をもって知った。 ２回目のボランティア体験では前回の経験も踏まえ、休憩は１時間くらい取らせてもらったしカレーを食べさせて頂いた。美味いより辛い、万年甘口カレーの我が家に慣れすぎた人間の末路である。しかしその辛さが癖になる。今では１ヶ月に１回はこのカレーを食べなきゃやっていけない体になっている。このカレーをみんなにも食べて欲しいと色んな方に布教しているのだが今のところ食べてくれたのは父だけである。ありがとう父、そして父にも好評である。カレーの話はさておき休憩を貰ってあぁ、今日は足痛めないなとか思いながら営業２時間前私は気づいた、あれこれ私と入山さんだけじゃね？というか入山さんずっと立ってない？休んでなくない？すげーと。待ってくれ今日の店の締め作業をボランティアの奴（2 回目）とスタッフの人１人だけなん？ヤバない？と不安を感じた、もしかしたら他のスタッフさん来るかもしれんとおもった。期待は虚しく来なかった、そして私たちは締めの作業に入った。私はこれ私洗い物しかできなくね？それ以外のこと一切知らんしなぁとコナンの閃きよろしく状態できゅぴーんとなった。そこからは早かった、永遠と皿を洗った、洗いに洗った、もうずっと洗ってんなこれ終わんのかなぐらいには洗った。入山さんも入山さんで忙しそうに片付けをしていた、あれに比べたらマシか、気が楽になって頑張った。なんかもう締めの作業以外もほとんど洗い物やってたので洗うの得意だよ！っていう自信がついた２回目だった。 そんな感じで夏ボラをこなしていき夏ボラ最後から２番目くらいの時にこれ夏ボラ終わってもここで働いていいですかねぇと言ったところ良いよ！ありがとうねと了承を頂き９月からも続行させて頂くことになった。 わいがやさんでは普段関わることがないような方々とお話をしたり絶対行く未来が見えないイベントへの参加をしたり未来の引きこもり予備軍な私にとって社会性やコミュニケーション能力を身につけたり新たな交友関係を築き上げられたりとてもありがたい場所です。部活行かない理由としても重宝させて頂いてます（本当にわいがやさんに行く日しか使ってません）。また、私の部活で国立のイベントに出るよって事を伝えたらスタッフさん達が来てくれたり誕生日のこと伝えたらカレーのパックくれたりわいがやさんやコーヒーハウスのみなさんのことは第二の保護者達だと感じてます、本当にいつもありがとうございます。来年は大学受験できっと４月くらいにはお店に立てられなくなるけどちょくちょく自習やらカレーの禁断症状抑制やらで顔を出したいなと思ってます。早く受験受かってお店立ちたい～。最後まで読んでくださりありがとうございます。

深いりコーヒーとトーストセットとわたし

椎谷 日菜

「ここで働かせてください、ここで働きたいんです！」

日本を代表する某アニメ映画のワンシーン。まるでその主人公になったような気分だった。気づくと私はコーヒーハウスと喫茶わいがやへの参加を申し込んでいた。

グループより一人行動派、予定にないことが入ってくるとあたふたし、慎重すぎてなかなか一歩を踏み出せない。長年行きたい場所リストの一番上に喫茶わいがやを掲げ、ホームページを何度もチェックしてはいたものの、勇気を出して足を運ぶことができなかった。そんな私が、初めてわいがやを訪れ、緊張した面持ちで「と、トーストセットをください。」と頼む。あまりのおいしさと、何とも言えないあの空間、コーヒーの香り、そして何よりも、その日お店に立っていたスタッフさんたちが楽しそうにしていること。自分の中で「ぴん！」とくるものがあり、国立公民館の担当者の方に即メールを送信した。その２週間後には青年室でみんなと一緒にマツケンサンバを歌い、コーヒー豆を挽いてコーヒーを淹れている。自分で自分の行動力に驚いた。

人生何があるかわからない、わからないからこそ面白い。

どんなに念入りに計画をしても、その時の状況や気分で、数多ある選択肢の中から思ってもみなかったような選択をすることがある。人と関わることで自分の見ていた世界が広がったり、それまで当たり前だと思っていたことが他の人にとっては全く当たり前ではなかったりする。日々生きている中でなかなか気づくことができない大切なことをこの数ヶ月でたくさん学ぶことができた。

「どうして国立公民館の活動に参加しようと思ったのですか。」

この質問に一言で答えらない自分がもどかしい。国立というまちが好き、社会教育やまちづくりに関心がある、支援とは、福祉とは何か考えたい、喫茶店やコーヒーが好き…。挙げればきりがない。

「コーヒーハウス、喫茶わいがやって何だろう。」

この問いの答えを探しても、なかなか答えが見つからないこともどかしい。
ボランティア活動、福祉、学びの場、居場所…。どれも当てはまりそうで、でもしっくりこない。

正解のないような問いの答えを見つけようと努力したところで、それがすぐに見つかるわけでもないだろう。人それぞれコーヒーハウスや喫茶わいがやに対する思いは異なるはずだ。

時に難しいなあ、大変だなあと悩み、自分の不器用さに落ち込む。翌日仕事があることを思い出すと気分が重くなることもある。それでも国立へと出向くのは、それ以上にみんなで一緒にお店をつくったり、あーでもないこーでもないとおしゃべりしながら活動したりすることが楽しいからかもしれない。言葉では表せないなんとも言えない心地よさと、自分が自分でいられる不思議な時間。疲れたら休んでもいいという絶妙な空気感。お腹の底から声を出して笑える瞬間や、少しの自信がつく日もある。学生時代によく感じていた心の内からふつふつと湧き上がるあの懐かしい気持ち。そんな自分の気持ちに正直になって、しばらくはのんびりまったり、自分のペースで活動に参加していこうと思う。

ぼんやりとした、わかるようでわからない、わからなくてもどかしい、それでいてどことなく懐かしくあたたかい場所。それがコーヒーハウス、喫茶わいがやの一番の魅力であるのかもしれない。

それぞれ忙しい中、活動を支え続けてくれているコーヒーハウスと喫茶わいがやに関わる全ての方へ、いつもありがとうございます。そして、これからも、どうぞよろしくお願いします。

そしてまたひとり、おじさんになっていく

末光 翔

こんにちは。末光（すえみつ）です。もはやレアキャラです。土曜も日曜も仕事な毎日です。本当はもっと青年室に行けるといいんだけど。

少し前、松井くんに、「どういうモチベーションで青年室に来ているのか」と聞かれたことがありました。去年（2023 年）の秋ごろ、水野くんに国立市の防災イベントに誘われ、有給を使って参加したことがありまして。松井くんにとって、「有給を使って防災イベント」という僕の行動が衝撃だったみたいなんです。ほかに有給の使い道が思いつかないので、ちょうどよかったというのが一番大きいんだけどね。

＜なぜ青年室に来ているのか？＞
改めて考えてみると、まじめな理由からしょうもない理由までいくつかありそうです。
ひとつここで挙げるなら、「青年室や、青年室でお世話になった人たちへの恩返しがまだできていない」という言い方になりそうです。今まで多くのメンバーやスタッフの人たちと交流し、考える機会をいただいて来た自分がここにあります。メンバーと直（じか）に関わることはとても楽しく、時には上手くいかず歯がゆく思うこともあります。その中でも根気よく関わろうとするスタッフや職員に魅力を感じ、コロナ渦でも SNS を駆使しながら全身でぶち当たるようにコミュニケーションを取ろうとするメンバーの活力を見てきたからこそ、今の自分があり、学生時代には考えたこともなかった福祉職で前向きに働くことができているわけです。

なので「青年室に報わねば」という気持ちはあるのですが、あいにくお世話になった人たちの多くは青年室を離れています。直接恩返しをする機会はなかなかありません。じゃあどうするかというとぼんやりしていますが、とりあえずは今青年室に来てくれている人たちの助けになればいいなあ、となんとなく思いながら、ふらふらとたまにイベントに来るおじさんと化しているわけでございます。このような「誰かから受けた恩を、直接その人に返すのではなく、別の人に送る」あり方を、「恩送り」あるいは「ペイフォワード（先払い）」というらしいですよ。僕ができているかどうかは別としてね。

＜片岡くんのセリフを紹介したいだけ＞

とはいえ、僕もいつのまにか 30 過ぎのおじさんになってしまいました。（というともっと上の年齢の方々に叱られそうですが…）青年室の主役はやはり若い世代の人たちなわけで、自分はいつまでふらふらしてるんだと。入山くんや片岡くんみたいにコーヒーハウスを支えているわけでもないし。公民館運営審議会の委員もほかの人に任せっきりだし。

そんな感じで弱気になっていた僕に対し、片岡くんが言ってくれた言葉が妙に好きでして。ぜひ紹介できればなと。こんな感じです。

おれはルビー、あいつはサファイア、きみはダイアモンド
楽しいことは倍に
悲しいことは半分こ

それがおれらのルールだろ

一気に片岡くんのワールドに引き込まれてしまい、頭がクラクラしそうになります。「きみはダイアモンド」なんて言われたの、生まれて初めてですよ。嬉しいやら恥ずかしいやら。

でもこのセリフも、青年室というコミュニティで、僕に対して、だからこそ言ってくれたのだと考えると…やはり青年室、魔物がひそんでいるというべきか？？人を青年にしてしまう力があるのかもしれない。青年。青年ってなんだ？よくわからなくなってきた。

とにもかくにも、片岡くんの言葉に甘えて、もう少し青二才のおじさんでい続けようと思います。そのまま全力中年になりそう。手取り増えてほしい。政府は減税すべき。

今後は青年室で新しいメンバーやスタッフを見かけ次第、「コーヒーハウス来てみて、どうっすか？？」と感想を求める系おじさんになろうかなとも思います。何も偉そうなことは言えないですけどね。みなさま見かけたら、どうぞよろしくお願いします。

原稿の提出は新幹線の中から

館（たち） 真理恵（たっちー）

前回の冊子コーヒーハウスの原稿を書いてからもう２年が経つのかと思うと、時の流れの速さにビックリする。

私はというと、２年前は富山から関東への引越しに転職と慌ただしい日々を送っていたが、今年の夏は富山と関東の二拠点生活をしながら、双方の合唱団で歌うなど相変わらず忙しい日々を送っている。

そんな中で今年は公民館への関わり方も、「たまに来るお姉さん」的な感じに変化してきた。(お姉さんになれているかは突っ込まないでください)でも、「離れる」という感覚は決してなく、合唱にも公民館にも時間を費やすことで、相乗効果が生まれてむしろ両方の活動が充実しているという実感がある。その中でも、今年は２つ嬉しいことがあった。

まず、合唱で知り合った人を公民館のスタッフとして呼ぶことができた。今年からわいがやのスタッフとして活躍している森井くんは、私ともともと合唱を通じて知り合いだった。

ある日森井くんが、「将来カフェをやりたい。カフェ店員として経験を積める場所があればいいのに」という話をしていたので、「わいがやっていう場所があるよ」と紹介したのがきっかけだった。今の仕事を続けながら、自分のペースで経験を積めるという部分はもちろん、コーヒーハウス自体が「多様性」や「生きづらさ」などのテーマを持っているということも、森井くんにはピッタリだと思った。

ロージナでランチをしながら、わいがや含めコーヒーハウスってこんなところだよ、という説明をしながら、そのまま公民館に連れていってアモクラに参加してもらったのが今年の４月。そこから継続してスタッフとして来てくれて、12月のクリスマス会ではピアノを披露してくれるなど大活躍の森井くん。ご縁を１つ繋げられたということが私としても本当に嬉しい。ありがとう森井くん！

また、逆に、公民館の仲間が合唱の演奏会に来てくれるということもあった。私は大学のサークルの先輩が立ち上げた合唱団に所属しているのだが、今年はちょうど結成 10 周年の節目の年で、大きな演奏会が２回あった。そしてそのどちらにも、公民館の仲間が来てくれた。

知り合いが来てくれると歌うのも張り合いが出る。公民館での私だけでなく、合唱をやっているときの自分も見守ってもらえることは、なんだか

心強い気持ちになる。

合唱と公民館活動を両立させることは、どこかで折り合いをつけて練習を休んだり講座に行けなかったりもするのだが、それが双方の活動の密度を低下させているということは決してなく、むしろ相乗効果で良い影響をもたらしていると思う。

これからも、武蔵野線や北陸新幹線で走り回りながら、慌ただしい日々を過ごしていきたい。と、クリスマス会のバンド練習のために乗っている武蔵野線から書く私であった。

（追記　その後、原稿を Word 化して提出するという作業が間に合わず、本当の締めきりである 12 月 21 日、北陸新幹線から提出した。午前中は椎名林檎で合唱をする企画に参加し、これから移動して富山の合唱仲間と忘年会です！）

「交差点」でダンスを

針山 和佳菜

小さな頃から、人前で何かを披露するのが苦手だった。緊張すると耳まで真っ赤になるから「和佳菜ちゃん熱あるの？」とか、「針山はそんなに俺のこと好きなのか！」とか、あらぬ誤解を招いてますますやりづらくなる。自分を変えたくて唯一挑んだ舞台の記憶は、小学校６年生のときの演劇発表会。「マッチ売りの少女」の役だ。

そんな私が、どういうわけだか毎年コーヒーハウスのクリスマス会で創作ダンスを発表する「身体表現～からだであそぼう～」の担当職員を、かれこれもう５年以上も続けている。この講座はアーティストの大川あじさいさんをファシリテーターに、しょうがいしゃ青年教室のメンバーさん、小さなお子さんと親御さん、シニア世代の方まで幅広い年齢のさまざまなバックグラウンドのある方が参加している。月１回のペースで開催される講座では、毎回あじさいさんが多彩なお題を用意し、参加者がからだの動きで表現していく。例えば、「やわらかいとかたい」では豆腐やレンガになりきり、「音を表現する」では川のせせらぎや落語を聞きながら所作に落とし込む。

……無理！絶対に無理！！最初のうちは、お題を聞くたびに恥ずかしいという気持ちが首をもたげていた。とくに小さな子が参加しているときは、こんなギクシャクした珍妙な動きのおとながいた記憶がどうかこの子に残りませんように、となぞの祈りを捧げてもいた。さらにクリスマス会での発表は、見知った顔からの視線に晒されるから照れと緊張は最高潮。きっとこの照れの正体は、少しでも自分を格好良く見せたいという、格好悪い自尊心です。

以前に比べると、その感情はだんだん小さくなってきたように思う。照れと小さな自尊心から少しずつ離れてこられたのは（まだ照れから完全に自由にはなれていないけれど）、まず１つはあじさいさんの言葉が大きい。無茶振りとも思えるお題を出しながら、いつも朗らかな笑顔で「表現するのに正解なんてないんだ！」という。格好良く見せたいって、自分のなかにある“こうあるべき”という表現の正解に当てはめようとしているだけなのかもしれない。あじさいさんの言葉を聞きながらふと周りを見渡すと、全身全霊でぴょんぴょんジャンプするメンバーさんや、自分の世界に没入して表現する参加者の方、そんなことはお構い無しにじゃれ合い走り回るちびっこたちがいる。たしかに、ここには“こうあるべき”はない。けれど参加者同士で空間が共有されている、不思議な感覚がある。

音楽や何かをからだで表現すること、それを同じ空間で共有することは、人と人との間にある壁も取り払ってしまうことができるのかもしれない。今年度のクリスマス会の発表は、最初はエルビス・プレスリーの「オンリーユー」にのせて客席から舞台に移動する動きからはじまった。身体表現の一般の参加者は、ふだんの活動では数名のメンバーさん以外コーヒーハウスのなかまと関わること

は全くと言っていいほどない。けれど、舞台に向かう途中でメンバーさんやスタッフと誰彼となく自然に互いに手を取り合い、その場でダンスをしたり舞台に導いて一緒に歩いたりしていた。こういうふうにしましょう、と事前に打ち合わせていたわけでもないのに。

前に先輩職員が「公民館は交差点」と言っていたのが、とてもしっくりくると思った。さまざまなバックグラウンドのある人が当たり前にそこにいて、ふとした瞬間やきっかけで出会い、触れ合って重なって、また離れていく。そうだ、わたしもコーヒーハウスという「交差点」でダンスを踊っている。照れも恥ずかしいもどこかに消えて、気がつけば夢中で「オンリーユー」の次の曲、Creepy Nuts の「Bling-Bang-Bang-Born」を踊っていた。

わいがやとわたしと、

比嘉 健太

喫茶わいがやにスタッフとして関わって 10 年近く経とうとしています。
正直、こんなに長い時間関わるとは思ってもいませんでした。この長い時間、様々な人と出会って来ました。社会教育実習で関わる人、喫茶実習に入るメンバーさん、就労移行支援でわいがやに入る実習生さん、夏ボラの中高生、そして様々なお客さん、そして先輩スタッフ。

今も長い時間を共にする人、様々な事情でわいがやから離れしばらく会っていない人、多分 1 番多いのは 1 度っきりの出会いでそれ以降ご縁が無くなる人……。「一期一会」という言葉を実感できるのもわいがやというお店のいいところかも知れません。初めてお店番に入る人がいれば、きちんと挨拶し、エプロンの付け方を丁寧に教え、お互いに自己紹介をします。多分これっきりのご縁になるかもしれないけど、もしかしたらここを気に入って引き続きお店番に入ってくれるかもしれない、そのような淡い期待を込めて新しく入ってくれる人と挨拶を交わします。

お店番をしていると、とっても忙しい時間もあればとっても暇な時間もあったり忙しさも波があったりします。

オーダーが立て込んで忙しい時間帯の声のかけ方は適切だったのか考える事もあるけれど、逆に暇な時間帯はなんの話題で話しかけようかとっても迷います。「どこに住んでるの？」「何部に入ってるの？」「わいがやは何で知ったの？」色々な話題で話しかけるけど、会話のキャッチボールは続きません……。世代も違うから「どんなアーティストが好きなの？」とか聞く勇気もありません……。でも、私が 1 番心がけてることは常に「聞き手」になることです。年上だから知識や経験を自慢するのではなく、ただただ話を聞く事が大切と、みうらじゅんさんが言ってた気がします。

来年も、これからもわいがやには初めて入る人や初めてわいがやに来てくれるお客さんがいると思います。私も初めてわいがやを訪れた時の緊張感、初めてお店番に立った時の緊張感を忘れることなくわいがやのお店番に立ち続けたいと思います。

社会人とコーヒーハウス

船橋 夏実

2022 年初夏、私は社会教育実習生としてコーヒーハウスに関わるようになった。大学 3 年生のときのことである。その後も細々とスタッフとして関わりを持ち続けていた。

2024 年春、私は社会人になった。今の仕事に就くきっかけはコーヒーハウスである。コーヒーハウスでの関わりを通して、「こんな風に障害のあ

るなし関係なく、みんなが一つのことに向かって平行な感覚で仲間として関わり合えるのっていいな。こういうことを仕事でもしてみたいな。」そんな風にぼんやりと思ったことがきっかけで、就活を進めた。現在、私は障害のある方の就労支援をする仕事に就いた。第一志望の企業には落ちてしまったものの、コーヒーハウスをきっかけとしてぼんやりと湧いていた「障害のある方と仲間のような距離感で同じ方向に向かって並走できるような関わり」への憧れは今の仕事において何とか実現させることができているような気がしている。だからこそ、このコーヒーハウスは自分の居場所としての機能だけではなく、「なりたい自分を芽生えさせてくれた」大切な原点にもなった。ゆえに、超細々でもいいからコーヒーハウスとの繋がりは途絶えさせたくないな…と思っている。

しかし、実際社会人になってみると、活動を継続することは思っていたよりも難しい！！！わかっていた状態であるけれど、やっぱり想像していた状態に自分がはまってしまうことも何だか悔しい。

まず、体力勝負である。基本は月～金の８時間勤務のため、土日（特に土曜）は何にもできなくなる。元々人より体力のない私は余計に回復が遅くて、コーヒーハウスへ行きたい気持ちがあっても、回復が追い付かず、出席するか否かは「体力次第です…」という曖昧の極みみたいな返事になってしまう。他の社会人スタッフはどうしているのだろうか。というか、率直に社会人とスタッフを両立させている人がいることに尊敬しかない。学生の頃も凄いなと思っていたけど、同じ社会人になったからこそ余計にその凄さが私の中で際立っている。

そして、講座を引っ張っていくような中心人物として手を挙げることも少し憚られてしまう。体力が追い付かなかったり、土日勤務も度々あるため次の回に出られると保証できるわけでもなかったりするため、「こんな不安定な立場では穴を空けてしまうんじゃないかな…」と躊躇してしまい、少し消極的になってしまってはいると思う。近年のコーヒーハウスは世代交代の波をヒシヒシと感じている。本当はその世代交代の、バトンをもらう側になりたかったんだけども…。私の気のせいかもしれないが、ベテランスタッフや職員さんからも時折講座やコーヒーハウスを引っ張っていく中心スタッフの存在を求めているような雰囲気？ふるまい？を感じることがある。そういう場面を見たときに、いつも私は少し心がヒリヒリすることがある。本当は手を挙げたいのだけど、「来月自分は公民館に来られるのかな…」と思ってしまうと、迷惑もかけたくないし、途端に自分の中の勢いが収束してしまう。それくらい今の想いと現状がかけ離れていているのかなーと思う。そういった意味で社会人１年目は葛藤の多い１年だった。しかし、どんなことがあったとしても、コーヒーハウスは私の大切な居場所であることに変わりはない。コーヒーハウスへの想いはしっかり胸の中にある。だからこそ、その想いを活動の中で活かしたり、発散させたりできる機会がなかなか持てないことも心苦しい。この悩みや葛藤はしばらく答えが見つからないかもしれないけれども、もう少し自分と周りのスタッフと向き合うことでいつか見つけ出せたらいいなと思っている。

社会人スタッフの皆さんへ、今度どうやって両立させているのか相談させてください！そして、その他のスタッフの皆さんへ、時折ひょっこり現れてはまたいなくなる私ですが、ぜひぜひ色んなお話させてください！コーヒーハウス愛を込めて、引き続き社会人も頑張ります。

過去と今、寮のキッチンから思うこと

保科 瑛

私の生活を振り返ると、特定の地域に根差した生活をしてこなかったと感じている。これまで地元の学校に通ったことがないし、地域の活動にもあまり参加してこなかった。そのため、小学校、中学校、高校と自分の家の近所に友達や知人はいなかった。休日は家族で過ごすか、受験が近づいてきたら予備校にこもっていた。こんな感じの生活はなんだかんだ充実していたとは思うが、いつも大体同じ感じで彩はなかったと感じている。変化のない平穏な日常。しかし、今は、大きく違う。忙しくはあるが、日々の変化を体感し、新鮮な気持ちで過ごしている。それは、大学に進学し、寮で一人暮らしをし、大学までも休日に行ってもいいと思えるくらいの距離に住んでいるのはあるだろう。バイト先も家から近い。気軽に関われて、集まれる友人が増えたように思う。さらに、大学の学園祭実行員会、コーヒーハウス、その他地域活動にも参加するようになり、地域との関りが増えた。決して、実家に対しての愛情がないわけではないが、今生活している場所の周りに対して愛着を持つようになってきた。これが、故郷に持つような情なのかもしれない。ああ。自分は良い場所に巡り合えたなと感じる。

こんなことを、ほのかに冷たい寮のキッチンで一息つきながら思った。

大学に入ってやりたかったこと

牧野 淳史

私は大学では社会学を専門分野としている。社会学ってなんだよとツッコミが入りそうなので私なりに（ざっくりと）説明すると、人と人との関わりの中で起こる様々な事を見ていく。そしてその事象などを研究していく。と説明すれば何となくわかるだろうか。私はいわゆる人間観察が好きだ。人と会話をする事も好きだ。さらに自分の知らない事に興味がわきやすい。自分の性格的にまさに社会教育や生涯学習といった分野が肌に合っているのではないかと思った大学１年生。それから２年後の大学３年生で社会教育実習の時間で濃密にコーヒーハウスと関わる機会があった。私は実習期間では主に青年教室の YYW や大きなイベントに参加をしたが、自然と活動の場に笑顔が溢れる空間で人と関わる事の楽しさを改めて感じた。人間、得手不得手があるので時にはどうやって交流をしようか、この方と会話をするのが少し苦手だな、などと私なりの悩みもあった。しかし、活動を振り返ると私の中で「私が思うに他の人を当てはめすぎていたのだな」という気づきがあり、だんだんとマインドが切り替わってきた。会話の中で脱線することがあっても脱線に存分に乗っかる、そこからうまい塩梅で元の話題に軌道修正していくように私の色々な当たり前、常識を実習で良い意味で壊してくれた。それに加えて家でも大学でも味わえない第３の居場所、いわゆるサードプレイスがコーヒーハウスであったなと強く感じている。活動をしている人は全員他者ではあるが、なんだか温もりを感じる。たった数ヶ月の実習であったとしても仲間として接してくれる。みんなでひとつの事について取り組み、思いっきり楽しむ。ゆるくやるときはゆるく、といった雰囲気で活動しているからこそ、場の感じが和やかで居心地が良いと感じられると実習全般を通して思った。実習期間では本当に数多くの経験をし、そこから学びや気づきを得る事ができた。国立市公民館の社会教育実習なしには今の私ができていなかったのだろうと思うとコーヒーハウスには感謝してもしきれない。そして私はこの沢山の経験を経て、社会教育主事の資格を有した公務員としてこの冊子ができあがる頃にはどこかの市で働いていることだろう。

「実習生のまついです」

松井 遊太郎

「実習生のまついです！」

誰もが聞き飽きたおなじみの文句だ。実習だけで 29 回来たという私が、初めてコーヒーハウスに参加したのは 2023 年の夏だった。

この頃の私は、今からするとお笑いだが、くそ真面目にもスーツで講座に参加していた[2]。そんな私も、約 1 年半をかけて、おかげさまで少しずつこの場に慣れていき、だんだんかつての、あの輝かんばかりのフレッシュさは失われてきてしまった。

昨年、私はくにたちの公民館のほか、高校に教育実習、さらに博物館にも実習に行った。それぞれの違いを語ると尽きないが、ともかく今も顔を出すのは公民館だけである。これは K 太郎様はじめ担当職員の策略にはまった面も多分にあるが、しかし、永遠すら感じるほどに長くいられるのは、それ自体が価値だと思ったりする。たいてい実習というのは通りすがりのものであって、その期間の中でどれだけ学べるか、貢献するか、が求められる。それはそれで真剣になるが、どこか寂しかったので、「次は何しよう」といつまでも言っていられるのが素直にうれしかった。いくら「今が大事」などと言ってみても、過去や未来から断絶されて、何も残らないのではかなしい。いま、この冊子に私の名前が載ることは、大げさに言えば、コーヒーハウスの長い物語に私の痕跡が残ることである。

くにたちの実習生のもう一つの特徴は、見学も待ち時間もないこと。つまり、実践と振り返りの連続の中にポーンと放り込まれることだ。とくに「まずは楽しんで」と言われることが印象深い。最初は、そんなこと言われても……と困った。元来友達も少なければ趣味らしい趣味もなく、授業と課題に身も心もささげる学生生活を満喫していた私には、かえって無理難題にしか思われなかった。とはいえ、生来わたしは超がつくド真面目なので、全身全霊楽しみ尽くしたつもりだ。これだけは、歴代の実習生でもなかなか負けぬと密かに、あるいは公に自慢としているところである。

「楽しい」というのは、コーヒーハウスを語るうえでしばしばキーワードとなる。あえて言えば、私はもともと、楽しむためにここへ来たわけではなかった。「楽しんで」と言われて楽しんでいたら、いつの間にか今も楽しんでいたのだ。こう考えると、「楽しむ」ということばも案外はっきりしない。はじめてしょう青に来たのは、クラフト講座の折り紙だった。私は折り紙が苦手だし、普段しないし、好きじゃない。だけど日誌には楽しかったと書いたはずだ。折り紙が好きでしょうがない人は、いつどこでも折り紙は楽しい、かもしれない。折り紙なんて未来永劫絶対につまらん、という人もいるだろう（私もそうだと思っていた）。しかし、ひとりで折り紙をしても楽しくないが、みんなとすれば楽しい、とか嫌いな奴と鶴を折るなんて苦痛だが、大好きな人と折れば幸せだ、なんてことは当然あり得る。

楽しいかどうかは気持ち次第だ、というつもりは毛頭ないが、楽しみ上手の人っていうのはいると思う。ひとりでは絶対しないことをみんなと楽しむ、イレギュラーにしらけず、むしろ面白がる、こんなことはこの場所ではしょっちゅうだ。それは、完成された楽しさの提供を待つのではなく、自分たちで楽しさへの回路をつくっていくということ。だから私たちは、どうやったら楽しいか年中考え続けている。これが実習で得た最大の学びだと私は思っている。

実習が終わっても実習生を名乗り続けてきたが、常に、この場所について学んでいる、という意識があって、ほかにピタッと私をあらわしてくれる

---

[2] スタッフ募集チラシには緊張した松井が写っている。

言葉が見当たらなかったからでもある。そのことにさんざん悩んだが、もう受け入れることにした。時々、みんなにならって「ここは私の居場所だ」なんて言ってみたい衝動に駆られるけれど、どうもしっくりこないし、どんな場所ならそう呼んでいいか分からない。
来年になって生活が変われば関わり方も変わる。実はけっこう恐れているのだが、別に私の居場所がなくなるわけではない、かもしれない。私にとってこの場所の意味が変わるかもしれないし、いい加減実習生を名乗らなくなるかもしれない。けれど、そんな私たちの変化はお構いなしにこの場所は続いていて、別に二度と入れなくなるわけじゃない。少なくとも私は、この瞬間もコーヒーハウスは半永久的なものだと信じていて、きっと次回の冊子も作られて、できれば私の名前をまた載せてやりたいと思っている。そういう思いが、この場所と活動をながく続けていく力なんだろう。ただ思ってるだけじゃなくて、もう少し動いてみようかな、なんつって気合い入れて冊子の編集に手をあげてみたわけ。この文章も書いたわけ。そして、今週もまた公民館に行くわけ。長い付き合いになるかもね。よろしくみんな。
　また、くにたちで会いましょう。

わいがやのコーヒー、青年室は憩いの場、今から国立へ行く

緑川 菜々実

「わたしとコーヒーハウス」の関わり方は大きく変化してきたなあと思う。私が初めてコーヒーハウスに来たのは３年ほど前だった。国立市公民館で社会教育実習を終え、スタッフとして活動していた友達に紹介してもらい、料理講座に参加した。スタッフやメンバーの皆さんはとてもあたたかく迎えてくれて、私はすぐにコーヒーハウスを好きになった。しかし、その当時はほかにも様々な活動をしていたため、なかなか予定が合わず、２・３か月に一度、料理講座にだけ顔を出すという関わり方をしばらく続けていたと思う。
　コーヒーハウスにきて１年くらいたったころから、私はほとんど活動に参加しなくなった。公民館に行かないだけでなく、大学にも、ほかの活動にも行かなくなり、ほぼひきこもり状態になった。「やりたい」という気持ちと「できる」がともなわず、「参加します！」と伝えた活動に無断欠席してしまうことも多かった。コーヒーハウスの皆さんにもたくさん迷惑をかけたと思う。それでも、やさしく様子を気にかけてくれたり、コーヒーハウスの活動に誘い続けてくれたり。そんな皆さんには本当に感謝してもしきれない。普段はなかなか言えないが、この場をお借りして伝えたい。何度も裏切ってしまって本当にごめんなさい。声をかけ続けてくれて本当にありがとうございました。おかげで私は今もコーヒーハウスで楽しく活動できています。
　そんな私の今のコーヒーハウスとの関わり方は「やりたい放題」である。皆さんのおかげで「やりたい」と「できる」が少しずつ一致するようになってきた今は、毎週末のように国立に通っている気がする。料理講座以外の講座にも参加してみたり、わいがやのスタッフになってみたり、コーヒーハウス以外の用事で国立に来ることもあったり。片道１時間半かかるはずなんですが、いつの間にか国立にいるんですよね。なんでですかね。自宅から国立までの定期って買えますかね。
　そんなことはさておき、コーヒーハウスの活動については、常に「やりたい」の気持ちに素直でいたい。「やりたい」を受けとめてくれる場であるから、というのはもちろん、それ以上に、この好きな場所と楽しい活動を義務感や責任感に奪われたくないのである。コーヒーハウスを継続していくためには、ときに誰かがやらねばならないこと、というものが存在することも、これまでそれを多くの人が担い、支えてきてくれていることも知って

いる。けれど、申し訳ないほどに私はやりたいことをやりたいだけやる。「やりたい」「やりたくない」と、「らく」「大変」は違うと思う。やりたいことをやるということは、大変なことをしないことではない。大変でもやりたいことを。やりたくないことをだれかが無理して笑顔でやらなくても成り立つ居場所であるように。みんなに対してそう思うから自分もそうあるように。嘘のないように。活動に参加する頻度は自分でも驚くほど増えたけれど、できることなら今後もこのスタンスは変えずに、わがままに「やりたい放題」し続けたいと思う今日この頃です。

コーヒーハウスと関わり始めて３年、少しこの場のとらえ方が変わってきたように思う。初めてここに来たときは、障害のある人の社会教育について興味があって、経験や学びを得ようとしていた。そうした役割をもつ活動であることはもちろんだが、最近は若者の居場所としての機能を強く感じるようになった。コーヒーハウスにはいろんな人が集う。それぞれにいろんな背景があり、いろんな考えを持ち、いろんな悩みを抱えて、でも、青年室という同じ場に自分の居場所を求めてやってくるのである。障害のある方とともに活動なんていうけれど、他の人に活動を説明するとボランティア？えらいね、なんて言われるけれど、コーヒーハウスという存在にいちばん支えられているのは若者たちなのかもしれない。

私はこれまでに１度だけ、何の用もなくわいがやに来たことがある。精神的に追いつめられ、逃げるように向かった先がわいがやだった。カウンターでホットコーヒーをたのむ。わいがやのスタッフや講座終わりに青年室に集まってきたみんなは、当たり前のように私を受け入れてくれた。コーヒーハウスが私の居場所になったんだと深く感じた出来事である。心がじんわりあたたかくなったのは、ホットコーヒーのおかげだけではないでしょう。

わいがやのコーヒーってスキー場のカレーみたいって思うんです。スキー場のカレーってあそこで食べるから特別おいしく感じますよね。そういうことです。あ、わいがやのカレーはスキー場ではなく、鳥もとさんのカレーです。とってもおいしいので、まだ食べたことのない人もぜひ食べに来てください。スキー場のカレーみたいなコーヒーも一緒にどうぞ。

早い時間の流れに、ゆっくりと寄り添う。

ミンジュ

子供の成長を実感するたび、誰しもが「早い」と言います。私も例外ではなく、もはや習慣的に「子供って早いよね」と言ったりします。時間の流れを早いと感じられるものは、身の回りにあふれています。英語で「電話を切る」のことを「hang up」ともいいますが、なぜ hang（～にかける、吊り下げる）を使うのか、昔ながらの受話器の形を知らない人にはなかなか受け入れられないそうです。それは子供だけではなく、あの形に慣れている大人にもやや難しいでしょう。時間の流れは、このように小さな言葉からも感じられるものです。

しかしコーヒーハウスは時間が止まっているように感じます。もちろん物理的な位置が変わらないことや、古いものが健在していること、夕焼けのようなあの黄色い照明もその要因の一つでしょう。喫茶わいがやにあるピンクの電話器もそうです。全く使えなくなったダイヤル式ピンク電話を、あなたは見たことがあるでしょうか。（もし見たことないのでしたら、ぜひ足を運んでみてほしいです。） 以前、その電話を娘が不思議に触ったことがあります。「それ電話だよ、昔の電話」と教えた時、びっくりしながら、ダイヤルを回してみたり、受話器向こうから音が聞こえないか色々試しながら電話をかけようとしました。変化があまりない

ようなコーヒーハウスも、メンバーもスタッフも多少は変わっています。お邪魔するたびに「初めまして」と挨拶することも増えてきた気がします。

ではなぜ時間が止まっているように感じるのでしょう。私が出した答えは、過去の私がそこにいるからでした。

高校生の友達に会うと、高校生になってしまいます。友達みんなも高校生になったためか、何気なく昔話に触れ合っても違和感なんてないのです。恋愛話や今の悩みを打ち明かしたりして話が弾んでる中、誰かが一瞬現実に戻ってこう言います。「こんな現実的な話しを、みんなでするなんて～」と。その場にいたのが「今の私」なら、そうは言わないでしょう。（余談ですが、この時私たちは税金の話をしていました。）

私にとってコーヒーハウスが全く同様です。足を運ぶたびに過去の私に会えて、あの時の喜怒哀楽を思い出すのです。そうやって振り返るときも、実は時間は流れますし、この文章を書いている瞬間も時間は流れています。そのスピードにゆっくりと寄り添うことができるのは、焦らない思い、もしくは、回想する思いが強いためだと思います。過去の私と今の私との乖離を感じつつも、その乖離すら愛おしくなってくる、そうやって早い時間の流れにゆっくりと寄り添うことができるのでしょう。日記を書いたり、アルバムの古い写真を見たり、あの時あの場所で聞いた音楽を聞いたりして、人は時間の流れにゆっくりと寄り添うものです。2014 年学生だった私が通ってたコーヒーハウスに、来年小学生になる娘と一緒に訪れるのは、きっとこの思いがあるためでしょう。

この先、時間の流れに追いついていけない自分自身に気づいた時、心の底から余裕を感じたいと思う時、コーヒーハウスに訪れてそのまま帰るかもしれません。ですがそれだけでも、過去の私にあってたくさん褒めてあげながらも、過去の私からたくさん勇気をもらって、また一歩踏み出せるでしょう。早い時間の流れに、ゆっくりと寄り添うでしょう。

「受け入れる」とは何か

森井 七生

どうすれば人はもっと、生きたくなるのか。

ここは、全ての人が、その人のまま受け入れられる場所。「あなたは何者なのか」と互いに見つめ合い、言語、非言語のコミュニケーションを交わす。身体的にも精神的にも。人は普通こういうものでしょ、という先入観や強要は最小限。もし先入観によるすれ違いに気付けば、そこで修正すればいい。そうやって互いの話をして盛り上がったり、協力し合って共に活動する。この意識が、ごく自然に働いている。

なんだ、出来るんだ。実現可能なんだ。
世界中がこうなればいいのにな。

勿論、喧嘩や好き嫌いが全く無いわけではない。それは人間だから。むしろ、学校や会社よりよっぽど皆好き勝手に、というより、解放的に、自由に過ごしている。また、過度に甘やかすわけでもない。ダメな時はダメと言う。

「受け入れる」ことと、自由と、秩序は、両立する。ここでは両立ができている。少なくとも、理想的な両立の状態を目指して、進み続けている。それも、命令されたからではなく、一人ひとりの能動的な歩みによって。

世界中がこうなることは、今はまだ難しいかもしれない。しかし、せめて、コーヒーハウスのような活動が１人でも多くの人に認知され、「受け入れる」ことについて考えを巡らせる人が増えていけば、人はもっと、生きたくなるのではないか。

反省文

森本 彩里紗（ありさ）

この２年間は、主に料理講座の人として関わってきました。時々行事にも参加して、薄い影をどうにか消えないように保ってきたところです。今回は、コーヒーハウス以外での公民館との関わりについて、学生時代にも書いたことがない反省文を書いてみようと思います。

突然ですが、「公民館運営審議会（以下：公運審）」を知っていますか？もし、この文章を読んでいるメンバーやスタッフで「知らないよ！」と思った方がいたら、大変申し訳ございません。それもこれもすべて私の力不足です。

公運審とは、社会教育法第 29 条から引用すると、「館長の諮問に応じ、公民館における各種の事業の企画実施につき調査審議するもの」です。毎月定例会を開催し、公民館の事業についての審議、館長の諮問に対しての答申の作成などをしています。学識経験者２名、学校関係者１名、社会教育に関係する市民12名で委員が構成されています。青年室からも委員の選出がされていますが、委嘱を受けて第 34 期の途中（2023 年８月～2024 年10 月）から前任者を引き継ぐ形で委員を務めることになりました。

第 34 期では館長の諮問を受け、答申「公民館の運営や事業に『市民の声』を活かしていくための方法や工夫について」をまとめました。「市民の声」とは何か、を前提に話し合い、現在公民館を利用する市民と、利用していない市民の双方の声を聞き、運営に活かす方法を探りました。具体的には、講座参加者アンケートの検討や、実際に外に出向いて市民からインタビュー調査をし、「市民の声」を活かすための５つの提案を行いました。ここでは紙幅があまりにも足りないので、ぜひ答申本文を読んでもらえたらと思います。

しかし、私の第 34 期委員としての公運審への貢献度はもはや０に等しかったのではないかと思います。最初は公運審という場がどんな場所なのか？ということや、自分が想像していたものとは異なる部分も多く、ビビりまくっていました。議事録を見ても、２ 時間の定例会で一言も発していない月も多々あり……。なかなか雰囲気にも慣れないまま、「私って公民館のこと全然知らないし、知ろうとしてなかったんだな……」という思いと自分の委員としての役割を果たせていない焦りと、とにかく反省と後悔と申し訳なさとが色々と混じったまま任期を終えました。

もう１つ並行して「公民館だより編集研究委員会（以下：編研」の第 19 期委員としても活動しました。編研は、公民館だよりを「より市民に親しまれるものにするために意見を述べる」場で、毎月定例会を開催し意見交換をしたり、コラム「サークル訪問」の取材・執筆などをしています。編研についても、委員としてもっと積極的に意見を出さないといけなかったと思っています。

何より１番反省していることは、コーヒーハウスの皆さんに公運審や編研の活動をたくさんアナウンスしたり、意見を積極的に聞いたりしようとしていなかったことです。委員として、青年室を利用するメンバーやスタッフの思いをもっともっと知ろうとするべきだったし、それを定例会に反省させる義務が果たせていなかったと強く後悔しています。

現在、第 35 期公運審委員（2024 年 11 月～）、第 20 期だより編集研究委員（2024 年 12 月～）として活動しています。この２年間の反省を繰り返さないように、委員としての責任を果たすべく、頑張りたいと思います。

最後に、コーヒーハウスの皆さん、いつもありがとう！！！これからも楽しく活動しましょう～！

マスクが少しずつ取れ始めた頃を覚えているかい

米川 愛実（ひでみ）

このタイトルを見て読者の方は、「コロナ禍の中で●●●の機会が奪われてしまった」や「現在は、コロナ禍にはできなかった●●の活動ができるようになった」などの旨が書かれるのだろうと思うかもしれない。確かに私が社会教育実習生として参加した 2022 年度のコーヒーハウスの活動は、まだまだ感染防止対策のための諸慣行が根強く、以後自身が関わることになった料理講座においても、作った料理をその場では食べずに持ち帰るというスタイルで講座運営が行われていた。それから２年以上経た現在は、“みんなで作って、みんなで食べる”というスタイルでの講座実施が可能になっている。料理講座を通して改めて、互いの表情を見ながらご飯を囲むのが、ここまで幸せなことなのだと思い知らされている。

しかし本文集で書き留めたいのはコロナ禍の中で感染予防のために必須だったマスクの克服記録だけではない。私が記したいのは、他人に本心を悟らせない/自己防衛のために無意識に被っていた自身の仮面（マスク）が、いつの間にか取れ始めたことになった記録だ。

そもそも仮面（マスク）とは何なのか。僕にとっての仮面とは、他者志向性の先に行きつく、自身を悟らせずに何か施しを与えんとする際に必要な道具だと考えていた。僕は小学生の頃から仮面ライダーが大好きで、自らの正体を隠して、ただ誰かを守らんと闘う孤高の戦士。彼らの仮面は、自身の正体を世に知らせることなく、誰かの居場所を守るために、そして日常的な姿から異世のものへの転身を果たすための道具であり、さらに敵に向けた慈悲の心によって溢れる涙を隠すためものであったそうだ。僕もいつか仮面を被って、人知れず闘うことヒーローになりたい！と思っていた。だから小中学生の時はボランティア活動に数多く参加し、小学校の花壇清掃や町のごみ掃除、赤い羽根募金、地域図書館での読みきかせなどに取組んで来た。ボランティアを行っている時には、有志で集められた、その場においては肩書も関係ない、現実世界における自身の顔を隠すために「仮面」を被り、自身も他者志向性を伴いながら、誰かに施しを向けられるように活動するのだとの信念をもっていたのだと思う。 しかしそのような「仮面」も、いつしか大人になるにつれて、自らの本心や感情を悟らせず、相手に何とか取り繕うために被る、いわゆる自己防衛のための「仮面（マスク）」になり果てた。おそらく多くの人々にとっても同じことを経験しているのだと思う。クラスメイトに馴染むために自身をキャラ化するために仮面（マスク）を被る人、就職活動において自分の見せ方を工夫するべく仮面（マスク）を被る人、自分自身が社会に馴染むために仮面（マスク）を被る人など、おそらく昨今議論され続ける排除社会の根強さがあるゆえに、みんなこの仮面（マスク）を被ることになっているのではないかと考えている。

国立市公民館での社会教育実習を終え、コーヒーハウスの不思議な空気感を言語化することが難しかったので、とりあえずコーヒーハウスでの活動を続けてみることを誓って２年ほどが経った。未だに両親や周りには「国立市公民館でボランティアをしている」と言っているものの、私はコーヒーハウスでの活動は不思議とボランティアとは思えず、何か現実世界における自身の顔を隠すために「仮面（マスク）」を被り、自身も他者志向性を伴いながら、誰かに施しを向けられるように活動しているようにも思わない。むしろかつて小中学生のボランティア体験で感じていたボランティアにおける非日常性を超えて、現実世界以上の“現実”がコーヒーハウスには存在し、その根底にあるのは「施し」や「他者志向性」ではなく、お互いの生き方の探り合いなどであるように思える。またコーヒーハウスに関わっているスタッフ・メンバーともに、自身の生き方に対する何かしらの葛

藤や悩みをむき出しにしているように感じ、何とか他者や他のものに取り繕うような姿を感じない。

つまりコーヒーハウスの活動に参加する中で得たのは、自身の仮面（マスク）が取れ始めているということへの気付きである。必要なのは、自身の中で定義付けられた、他者志向性の先に行きつく、自身を悟らせずに何か施しを与えんとする際に必要な道具である「仮面（マスク）」でもなく、自らの本心や感情を悟らせず、相手に何とか取り繕うために被る、いわゆる自己防衛のための「仮面（マスク）」でもなかったと振り返る。おそらくコーヒーハウスの不思議な空気感は、排除性を超えたものが醸成されつつある証拠であり、それゆえ自身の仮面（マスク）が取り払われつつあるのだと思う。

コロナ禍を経た現在においてマスクの必要性を感じられなくなったが、また着用が必要になる世の中になれば戻って来たい。今度は居場所を守るために、仮面を被って。

私のひきこもり体験記
ー生きづらさをめぐる一考察ー

鷲尾　勇輝

1　ひきこもりへの道

大学入学から数ヶ月が経ったときには、サークル活動の勧誘の時期はとうに過ぎていた。気がつけば大学に居場所はなく、友人と呼べる存在もいなかった。そんな私は、授業の空きコマに食堂で楽しそうにしゃべっている学生の群れをぼんやりと眺めていた。対人関係を築くことに不安を抱えながらも、他方では友人ができないことに漠然と悩んでいた。どう考えても「コミュ障」な学生であると言わざるをえない。

そのままの状態で大学３年生となった私にとって、就職活動は大きな障壁となった。キャリアセンターの相談員に話をするのも苦痛な上[3]、履歴書に記入しなければならない「学生時代に力を入れたこと」もあまり思い浮かばない。就職活動を始めようとは到底思えなかった。４年生になってからは、さすがに不安と焦燥に駆られて就職活動を進めようとした。しかし、キャリアセンターへの相談でさえ苦痛に感じていた私にとって、面接はなおさら苦痛なものだった。結局、面接は１回しか受けなかった。こうして、「コミュ障」な学生は進路未定のまま大学を卒業し、ひきこもり生活に突入した。

2　喫茶わいがやとの出会い

大学卒業から１年半の間、私はひきこもり生活を続けた。生活リズムこそ崩さなかったものの、近所を歩いたりコンビニで買い物をしたりと最低限の外出をするので精一杯だった。今になって振り返れば、対人関係で疲弊しないように行動をセーブしていたのだろう。

その後、私は知人の紹介で喫茶わいがや（以下わいがや）に関わるようになった。大学生の頃から「コミュ障」ぶりを遺憾なく発揮してきた私にとって、当然ながら接客は未知の領域であった。しかし、わいがやは利潤の追求を目的とした喫茶店ではなく、穏やかな雰囲気が流れていて居心地がよかった。気がつけば１ヶ月に４回ほど店に立つようになっていた。そのような生活を２年ほど送る中で、時には誰かを傷つけたり、周囲の言動に傷ついたりすることもあった。また、「コミュ障」ゆえにお客様の質問に答えられずに沈黙することもあった[4]。けれども、そんな時には周囲のスタッフがさりげなく助けてくれた。不器用ながらにも周囲との関わり合いを続ける中で、いつしか何気ないおしゃべりを交わす友人もできた。私にとって、わいがやに関わり続けた２年間は、まるで学生時代に過ごせなかった時間を取り戻すような

---

[3] 相談員に何ら問題や落ち度はない。

[4] 私には吃音と自閉スペクトラム症があり、訊かれたことにすぐに応答できない特性がある。

日々でもあった。何より、「「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と言うこと、接客をすること、「ありがとう」と言われることを繰り返す中で、対人そのものに免疫がついたようだった」[5]。

3　生きづらさを和らげるもの

1と2では、私のひきこもり体験やわいがやとの出会いを振り返ってきた。3では、それらをもとに、わいがやの持つ生きづらさを和らげる効果について考えてみたい。

1で述べたように、学生時代の私は友人や居場所を見つけられないまま就職活動を進めようとして行き詰まった。就職活動は、「学生時代に力を入れたこと」といった過去と、志望動機といった未来の狭間をさまようような行為である。おまけに自己PRまでしなければならない。つまり、就職活動においては、現在という時制は置き去りにされがちであるといえるだろう。一方、わいがやを含めたコーヒーハウスの活動では、「過去でも未来でもなく、〈いま・ここ〉の充足に重点が置かれている」[6]。私がわいがやに居場所や友人関係を見出すことができたのは、まさに〈いま・ここ〉を生きているという感覚を取り戻せたからにほかならない。

もちろん、私のひきこもり体験は就職活動の失敗に起因するという見方も成り立たないわけではない。しかし、対人関係に不安を抱えたまま就職活動を行おうとした結果、過去と未来の狭間で身動きがとれなくなったのが実際のところではないだろうか。ここに私のひきこもり体験における生きづらさが見え隠れしているように思えてならない。そして、そのような生きづらさを和らげてくれたのは、まぎれもなくわいがやである。時に笑い、時に泣き、何気ないおしゃべりを交わす中で、いつしか対人関係への不安が落ち着いた。前述のとおり、〈いま・ここ〉を取り戻すこともできた。私にとって、わいがやで過ごした日々はかけがえのない時間である。むろん、わいがやは生きづらさの特効薬であるとは言い難い。しかし、時間をかけて少しずつ、凝り固まった生きづらさをほぐしていく効果があるのではないだろうか。

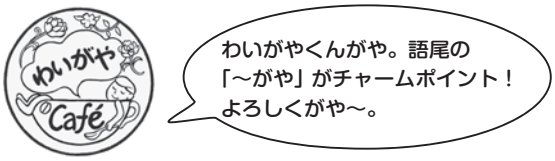
---

[5] 入江紗代『かんもくの声』学苑社、2020年、171頁。

[6] 南出吉祥「若者の「生きづらさ」とコーヒーハウス実践」喫茶わいがや40周年記念ブックレット『「思想」としてのわいがや』障害をこえてともに自立する会、2021年、41頁。

公民館のQ&A

このコーナーでは、公民館についての疑問に答えます。
今回は、公民館半地下の「喫茶わいがや」について、マスコットキャラクターの「わいがやくん」に答えてもらいます。



Q．なぜ公民館に喫茶店ができたんですか？

A．●45年前の1980年、公民館に集っていた若者たちの活動から生まれた喫茶店なんだがや。しょうがいのある・ないにかかわらず、「わいわいがやがや」一緒に学びあい、地域でつながろうと運営してきたがや。

Q．先日、お店に行ったら閉まっていたのですが…？

A．●本当に申し訳ないがや～。わいがやには専従スタッフがいなくて、大学生や社会人、喫茶実習生のしょうがいのある若者たちがボランティアで店番をしてオープンしているから、毎日開けることが難しいんだがや。**開店日は、お店の前のカレンダーやSNSで確認してほしいがや。**今後も開店日を増やす努力を続けるので、温かく見守ってほしいがや。

↑オープン日はこちら

Q．おすすめのメニューはなんですか？

A．●やっぱりおすすめはハンドドリップコーヒー（220円）がや！岩手県宮古市の「とりもと」から仕入れているチキンカレー（単品630円）も名物がや。

Q．公民館以外でも、わいがやのコーヒーを飲むことができますか？

A．●「くにはたちのつどい」（成人式）など、地域のイベントに出店することもあるがや。近々だと、**11月４日（月）にあるくにたち市民祭に出店**するがや！僕の看板が目印なので、ぜひ遊びにきてほしいがや。

Q．私もわいがやのスタッフになれますか？

A．●ありがたいがや～。活動に関心のある**高校生から30代くらいまでの若者をいつでも大募集**しているがや！週１回や１時間からのお試し実習もできるから、ぜひホームページからエントリーしてほしいがや。

※喫茶実習をご希望のしょうがいのある方は、毎年４月に募集をしている「しょうがいしゃ青年教室」にお申込みください。

↑スタッフエントリーはこちら

「くにたち公民館だより」2024年（令和６年）10月5日号